
足が長いただのオジさん

あゆみかん

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

足が長いただのオジさん

【Nコード】

N4377C

【作者名】

あゆみかん

【あらすじ】

【？/短編（読了約9分）】

しばらく行方をくまします。後はオジさんに任せて「……そんな謎の文面を残し突然に失踪？した我が伯母。オジさんって一体誰？
夏下あぐりのとあるひととき。

簡単に、これまでの経緯を話そう。

まず、私は夏下あぐり。顔も体格もよく丸いと言われるし、身長145センチしかない。オチビの中学一年生だ。おかつぱみたいな頭なのは、一番自分にしっくりくるから。

私の人生という中で、ヒデキではなくて悲劇が やってきた。

学校から帰ると、たった一人しかいない身寄りの伯母が、謎の置き手紙を残し失踪した。置き手紙の文面は こうだ。

『しばらく行方を くらまします。あとはおじさんに任せときなさい。 あなたのオバより』

……ごめん、伯母さん。意味わかんない上に「オバ」を「オバQ」と読み間違えた。ちなみに伯母は、オバQに似ていると思う。

……そして、読み終えた途端。

ピ~~~~ン、ポ~~~~ン……。

マンションのインターホンが呼んだ。私は手紙を持ったまま、インターホンに出る。「どちらさまですか？」

「尾路^{オジ}という者ですが」

……………。

私は一瞬、顔が引きつった。

尾路……オジ、さん……………。

「君の伯母さんに頼まれて、様子を見に来ただけだ。女の子一人じゃ物騒だから、って」

と、顔は分からないが、男の明るい陽気な声だった。

女の子一人で物騒って。ちょっとちょっと伯母さん？

「ひ、一人で大丈夫です。お、伯母は どこへ行ったのか、ご存知なんですか？」

私が ちょっと上ずった声で言うと、尾路と名乗る男は しばらく困ったように「うーん」と唸り声を上げた。

「みどりさんは、ちょっとマグロ買って来るって出てったみたいなんだけど……たぶん、あの人の事だから2・3日は帰って来ないつもりなんではないかなあ」

私は ちょっとガビーン……と思った。みどりという名の伯母は、一体どこまでマグロを買いに出かけたのだ？

「……わかりました。そんな伯母なのは百も承知です。……それよりも。あなたは、伯母の お知り合いの方なんですよね？？ 本当に」

私は疑う。当然だ。姿の见えない男を、ホイホイと受け入れてはいけない。つい先日、強盗のニュースを見たばかりなんだ。

尾路さんは理解してくれたのか、こう言ってくれた。

「ドアは開けなくていいよ。このまま帰るつもりでいたから。たまに様子を見に来るし。……もし何か困った事があったら、コレ」

と言って、ゴソゴソと音がしたので下の方を向くと。玄関のドアのポスト口から、白い紙が覗きこんだ。私は それを受け取る。

その紙を見ると、電話番号らしきものがメモされていた。

「それが私の携帯の電話番号。何か あったら そこにかけて。すぐ飛んで来るから」

私のために？ 伯母がそう頼んでくれたの？

「……わかりました。ありがとうございます」

「それじゃ、また。戸締り、気をつけてね。あと火とかもね。じゃ」
尾路さんは そう言っただけで去って行く。足音が段々と遠くなっていた。

私はそっと、玄関のドアを開けた。ちょうど、同じ階に住むウキノさんとバッタリ会った。

「こんにちは、とお互い挨拶した後、私はウキノさんに さっきここに居た男は、どんな男だったのかを尋ねてみた。ウキノさんは、普通の背の高い おじさんだったわよ。ちよつとハゲててね……うーん、特徴？ あんまり顔が見えなかったからなあ……。どこにでも いそうな感じで……」
と、首をひねった。

私は お礼を言って、戻った。

普通のハゲた おじさんかあ……。どうせなら 山ケン××みたい
な人だったらタイプだったのに。でも優しそうな感じがした。

足長おじさん……。そう思いながら、ソファで うたた寝を開始した。

……

しばらく経って、破壊音のような音で目が覚めた。

ドンガラガッシャンピ~~~~ンッッ。

「ひえっ……！！ か、カミナリッ!？」

びっくりして目が覚めた。外は大荒れ。ベランダの窓に打ちつける激しい雨と風。そして時々襲う光、すなわち雷。

私は雷が すごく苦手。いつもは伯母さんの側にピッタリくっついてるんだけど……。

ドンガラガツションショ〜〜ンツツ。

「ふいあつ……!! もうやめて〜〜っ!!」

私は うずくまって耳を押さえた。部屋は暗がりのまま。電気をつけに行く気さえ そっちのけ。願わくは、早く雷雲が過ぎ去ってくれん事を……。

その時。ヒラリとメモ用紙がテーブルの上から舞い落ちた。さっき、尾路さんが残っていたメモ……ちょっと、尾路さんの声を出してみる。

「何かあつたら……」って言った。でも、こんな事頼んでもいいものかどうか。

どうしよう……いいかな。

迷っていると、また遠くで上空がゴロゴロと鳴り出した。「ええいつ、いいいつ」

私は、電話を かけてみた。

トゥルルル……トゥルルル……。

ガチャツ。

「はい」……覚えてる通りの、尾路さんらしき声だった。私は深

呼吸をして、問いかける。「あのっ……。尾路さんですか？ 私、あのっ……。夏下あぐりです」

「あぐりちゃん。どうしたの。何かあった？」

「あのっ……。か、雷が怖くて……。ヒヤッ!!」

話の最中にまた、大きい音が1つ。たまんないっ。

「スミマセンツ……。!! あ、あの、せめて、電話、つなげっ放しにしているいいですかッ。夕立、だと思っんで……。その……。しばらくの間だけ……。すごく怖くって……」

冷や汗を どばどば かきながら、そう言ってみた。断られるかもしれない、断られても当然だろう……。そう思っていたが。

「いいよ。そんな事。一人じゃ心細いだろう。……。そうだ！ 何か話でもしてあげよう」

意外な展開に なってしまった。このまま、尾路さんのペースに巻き込まれていきそうだな。

「うーん。何を話そう。格差社会と日本の未来について話そうか……。それとも、資本提携・モバイル事業強化について……。いやいや、若い子は、ファッションや漫画の方がいいかな。5人組の少女隊には、興味あるかい!？」

一体何言ってるんでしよう、この大人は。

「いえ、あんまりTV観ないんで……」と、おずおずしていると、尾路さんは さらに明るい声を張り上げた。

「そうだ！ 私と妻の、馴れ初めの話をしようか!」

その声のすぐ。ドタドタ……。! と、何者かが電話の向こうで近づいて来る音がした。

「バカ言ってるんじゃないよ！ この、恥さらしッ!」

ボカツ。

……とても、鈍い音がした。

……。

静かになった……。

「お、尾路、さん……??」

反応が無かったので、私は心配になって何度も名前を呼んだ。しばらくして尾路さんからの応答が やつと返ってきた。「ふっかゝ
ゝつつ!!」

いや、復活て。

「何が……? 今の人は??」

「ウチのカミさん。いやー、ちょっと知らないはずの世界に行っちゃってたよ。ワツハツハツハツハツ」

陽気だ。ワツハツハツハツハツて……笑い方が社長クラス。

「大丈夫ですか? すごい一撃の音が聞こえたんですけど……。見えない所で何が」

「大丈夫大丈夫。これぞコミュニケーション! 今時の奴らに教えてやりたいっ」

……はあ……。

「今気がついたけど。『大丈夫』という漢字を続けて書き連ねると、隠れて『人』という字が いっぱい並ぶんだね。気持ち悪いね。ははははは」

……何言ってるんですか。本当に大丈夫なんですか。

「うーん。怒られちゃったから……。石田三成の話でも、しょうか

な」

何故。

ともかく、それからずっと尾路さんから、石田三成についての話を えんえんと聞かされた。

石田三成……。

石田 三成は、安土桃山時代の武将・大名である。豊臣政権の五奉行の一人でもある。

永禄3年（1560年）生まれ、慶長5年10月1日（1600年11月6日）に没。

別名 佐吉（幼名）、石田三也（初名）、官位は従五位下、従四位下、治部少輔。

戒名は 「江東院正軸因公大禅定門」。

永禄3年（1560年）、石田正継の次男として近江国坂田郡石田村（現在の滋賀県長浜市石田町）に生まれる。三成は羽柴秀吉（のちの豊臣秀吉）が織田信長に仕えて近江長浜城主となった頃の（以下、超長いので略）。

三成は家康により、六条河原で斬首された。享年41。その首は家康により、晒し首にされたという。墓所は京都大徳寺の三玄院だそうだよ（by作者必死）。

勉強になった。これでもう、テストに石田三成について何聞かれなくても答えられる。

………のかなあ。

やがて、眠気が そろそろレベルEに なってきた頃。尾路さんは「こっちは雨が止んだみたいだけど、そっちはどう？」と切り出

した。

外を見ると、いつの間にか こっちも雨が止んでいた。風も雷も、どこか遠くへ行ってしまったようだ。私はホツとして、「もう大丈夫だよ。尾路さん」と返事をした。

「そうかい。じゃあ、そろそろ……」と、少し淋しげに尾路さんは言葉を切った。

「尾路さん」「ん？」私は ちょっと照れながら、お礼を言った。「本当に、ありがとうございます。……すごく、楽しかった。また、電話かけても いいですか？」

すると尾路さんは快く引き受けた。

「もちろん。みどりさんが居ない間は私が君の親だし、責任も引き受ける。こう言うと、嫌だったかな？ ……ならば、こう言おう。

カモン！ マイ、ベイビー、スイート！！ ……」

ボグツ。

……また、ヤラれているね？ 尾路さん。 스위트、何て言うつもりだったの。

「と、とにかく。いつでも おいで。また、様子を見に行くから」
生きているらしい。よかった。

私はクスクスと笑う。「尾路さんて、どういう人なんだろう。会うのが楽しみかも」と、つい思った事を口にしてしまうと、尾路さんはフザけているのか本気なのか、最後に こう言った。

「よく人から『足が臭い』って言われてるけどねー。ハハハハハハッ」

足が臭い……。

足が臭い……ただのオジさん……。

2日後。やっと伯母の みどりが帰って来た。両手に抱え込む程の、巨大マグロを持って来た。

……ここにも 心配な大人が一人……。

「フー。疲れたわ。ちょっと通訳に手間どってね」

と、伯母は青いビニール袋に入ったマグロを床に置き、他の荷物は玄関に置いたまま、ソファに どっさりと重い体を預けた。

もう何も聞かない。私は そう思った。

マグロの事なんかより。

「会っては いないんだけど。尾路さんの声を聞いたよ。とっても 優しい人だった」

私は、伯母に これまでの いきさつを話した。全てを言い終わると、伯母は ちょっと首を傾げた。私が不思議そうにしていると、伯母がポツリと つばやいた。

「……奥さんの加美子カミコさんは、5年前亡くなって今は一人身のはず なんです……??」

思い返す。

『ウチのカミさん』

……カミさん 加美子さん?? へっ???

尾路さんに、二度もリアルタイムで攻撃していたのは。

……誰??

足が長いただのおじさん

「まあ いったか」

伯母はマグロの方に関心が行った。

まあ いったかって……。

よくないっつ……！

《END》

(後書き)

【あとがき】

……心配な大人2人の話になってしまった。
ご家庭でマグロ解体ショーですね。

ご意見・ご感想ありましたら、お願いします。

本作品は、読者様のご指摘により加筆・修正をしています。)

H19.11.5.)

ありがとうございました。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4377c/>

足が長いただのオジさん

2009年3月24日10時23分発行